中尾山古墳（なかおやまこふん）

1.はじめに

中尾山古墳は奈良県高市郡明日香村大字平田に所在する終末期古墳です。江戸時代には「中尾塚・中尾石塚」とも呼ばれ、南側に隣接する高松塚古墳とともに文武天皇の檜隈安古岡上陵（ひのくまのあこのおかのえのみささぎ）ではないかと注目を集めてきました。

今回の調査は現在、奈良県・橿原市・桜井市・明日香村が登録を目指している「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産である中尾山古墳の墳丘規模や構造などの解明を目的として実施しました。

2.主な検出遺構と出土遺物

【墳丘と外部施設】

中尾山古墳は東西に伸びる丘陵の頂部に位置しています。調査の結果、三段築成の墳丘とその周囲をめぐる三重の外周石敷を有する八角墳であることが判明しました。墳丘は版築で築かれ、対辺長約19.5m、高さ４m以上を測ります。墳丘の一段目・二段目の表面は、ともに裾部に花崗岩の根石を並べ、その上に拳大から人頭大の石材を小口積にして、さらに上部に根石同様の石材を垂直に積み上げた基壇状の石積みとなっています。墳丘の三段目は一段目・二段目とは異なり、版築の盛土のみで八角形に整形しています。三段目の墳丘東側には鎌倉時代の盗掘孔が存在しています。

外周石敷は墳丘の裾部から三重にめぐっていることを確認しました。外周石敷の対辺長は三重目で約 32.5m を測り、広範囲にわたって石敷が施されていることがわかりました。また、外周石敷一重目の上面からは沓形石造物（くつがたせきぞうぶつ）が出土しました。

【埋葬施設】

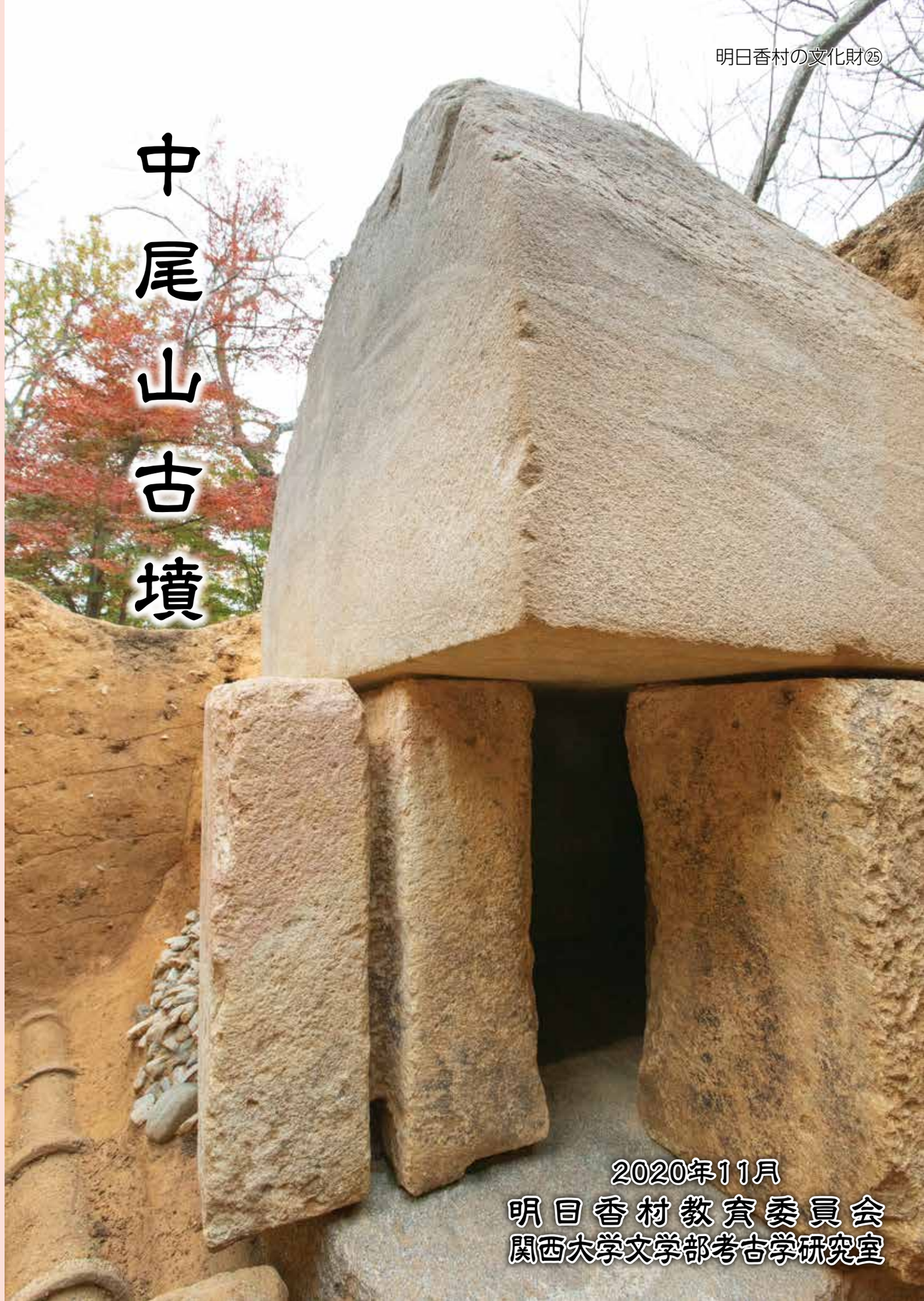
埋葬施設は底石１石、側壁２石、奥壁１石、閉塞石１石、天井石１石、隅石 (柱石)4 石の合計 10 石の切石で構成された横口式石槨です。内法の規模は高さ、幅及び奥行各約 90cm を測ります。また、石槨壁面は非常に丁寧に磨かれており、全面に水銀朱が塗布されています。床石は片麻状石英閃緑岩（へんまじょうせきえいせんりょくがん）が使用されており、床面の中央部は 60cm 四方、深さ 1cm の範囲が凹状に削り込まれています。この区画には火葬骨を納めた蔵骨器を安置するための台が設置されていたものと考えられています。側壁、奥壁、閉塞石及び隅石は火山礫凝灰岩（かざんれきぎょうかいがん）(竜山石) が使用されています。側壁は、石材同士が接する部分をＬ字形に切り欠いて、それぞれが組み合うよう加工が施されています。石槨の入隅をなす四隅には石柱状の隅石 (柱石) が設置されており、閉塞石東側の隅石は盗掘によって失われています。天井石は細粒黒雲母花崗岩（さいりゅうくろうんもかこうがん）が使用されており、下面は特に丁寧に磨き上げられています。閉塞石の南側には墓道が設けられており、埋葬後、版築により埋め戻されています。この墓道の下面には幅約 100cm、深さ約 20cm の拳大の川原石を充填した暗渠排水溝（あんきょはいすいこう）が設けられています。

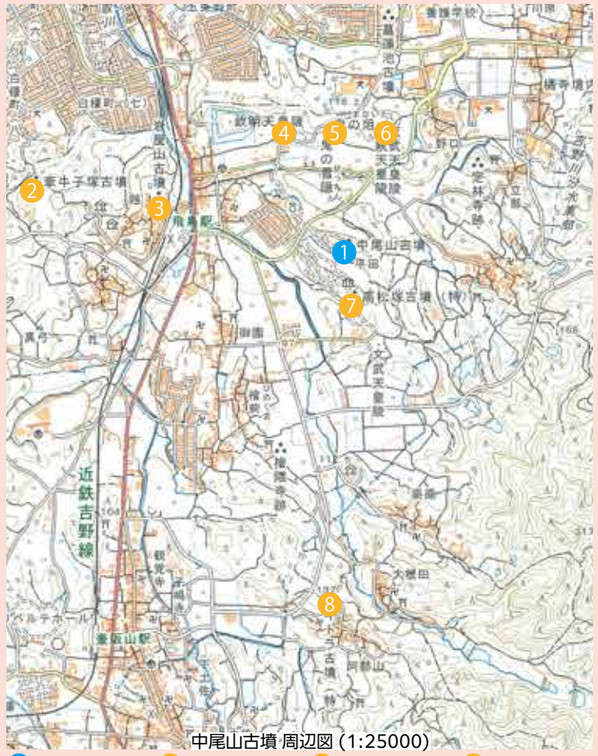
【出土遺物】

出土遺物は須恵器片、沓形石造物などがあります。沓形石造物は、火山礫凝灰岩（かざんれきぎょうかいがん）(竜山石) が使用されており、幅約 95cm、高さ約 67cm を測ります。表面は平滑に仕上げられ、端面はしのぎ状に約 135 度の加工が施されています。この石造物については、墳頂部の装飾に用いられていたと考えられています。

3.まとめ

今回の調査では中尾山古墳が三段築成の八角墳であることが確認され、一段目・二段目については基壇状を呈していることや、三段目は版築のみで整形されていることが明らかとなりました。さらに外周石敷が三重にめぐっていたことも判明するなど、石敷が広範囲にわたって敷設されていたことも確認することができました。特異な構造を呈する八角墳であるとともに、埋葬施設が蔵骨器を納めた横口式石槨であることなどから、中尾山古墳が古墳文化の終焉を解明するための重要な資料となるでしょう。

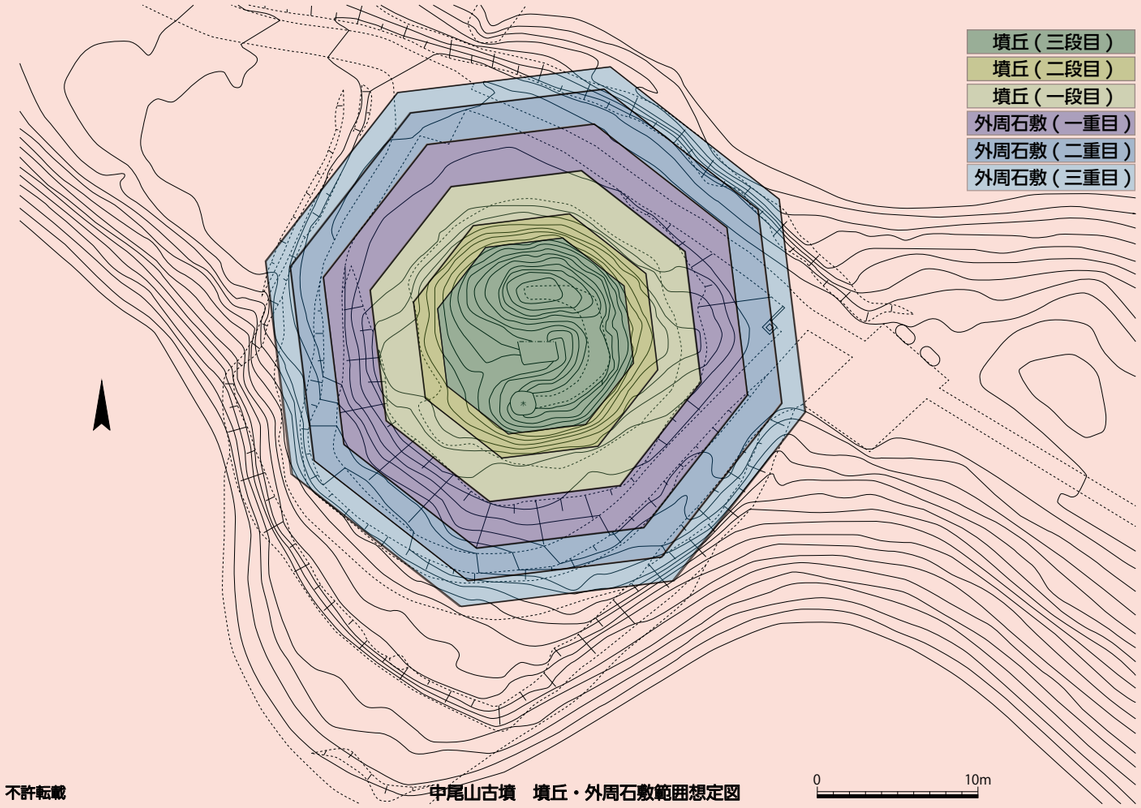




中尾山古墳周辺図（1:25000）

1 中尾山古墳　2 牽牛子塚古墳　3 岩屋山古墳　4 カナヅカ古墳
5 鬼の俎・雪隠古墳　6 野口王墓古墳　7 高松塚古墳　8 キトラ古墳

不許転載



中尾山古墳　墳丘・外周石敷範囲想定図

奥壁（南から）

床石（真上から）

外周石敷隅部（北から）

沓形石造物（真上から）

墳丘と外周石敷（東から）

閉塞石（北から）